The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	地平線の向こうにあったもの : Amma Darko『売られた夢』
Author(s)	村上, 八重子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2009, 2008, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

地平線の向こうにあったもの

——Amma Darko『売られた夢』——

村上　八重子

1．はじめに

ドイツ語を母語としない、あるいはドイツの文化背景を持たない作家によるドイツ語文学について語られる際、西アフリカ・ガーナ生まれの Amma Darko (1956 -) の位置は他の作家とはいささか異なっている。彼女の最初の作品『売られた夢』[1]は、ガーナの公用語である英語で書かれており、続く『蜘蛛の巣』[2]も英語で執筆された。それらはドイツ語に翻訳され、ドイツにおける「移動の、移民の文学（Migrationsliteratur、MigrantInnenliteratur)」の重要な書き手として高く評価されている。

Darko は、ガーナ北部の町、Tamale に生まれた。里親により養育され、そのおかげで学校に通うことができた。Kumasi 大学で社会学を修め、1981 年から 1987 年まで政治亡命を求めてドイツのヒルデスハイム近郊に住む。ドイツでは掃除婦や、ウエイトレスといった仕事を経験しており、この期間の体験が、彼女の執筆の契機となる。

当時の西ドイツでは、この 1980 年代には、政府による労働者としての外国人の受け入れは終了していた（公的な受け入れ期間は 1955 年から 1973 年）が、いったんドイツにやってきた外国人労働者たちは、経済状態のあきらかに劣る自国に戻るものは少なく、逆にドイツに家族を呼び寄せるようになり、彼らの定住の問題や、宗教や習慣の違いによるドイツ人との軋轢、こどもたちの教育問題など、さまざまな問題を生み出しつつあった。この状況を背景に、文学の領域では、80 年代とはまさに、外国人労働者や亡命者が生み出す作品が、いわゆる「外国人労働者の文学（Gastarbeiterliteratur）」や「外国人の文学（Ausländerliteratur)」として認知されはじめた時代であった。中心となる作家はほとんどがイタリア、ギリシャなど、もともとドイツに「出稼ぎ労働者」を輩出していた国々や、トルコをはじめとするイスラム圏の国々からやってきた人々であった。

アフリカ系の住民も、もちろんドイツに多く居住していたのであるが、文学の世界で注

---

[1] テキストは Amma Darko: *Der verkaufte Traum* (Übertr. aus dem Engl. von Carmen Baerens. Schmetterling Verlag. 1999）を使用し、日本語訳はすべて拙訳による。カッコ内の数字はページ数を表す。英語タイトルは *Beyond the Horizon* (Oxford: Heinemann's African Writers Series. 1995)。

[2] ドイツ語タイトルは *Spinnweben* (Übers. Anita Djafari. Schmetterling Verlag. 1996) 。原題は *Cobwebs* であるが、英語版は刊行されていない。

目を集めるようになるのはやや遅れていた。[3]

Janos Riesz はアフリカ系ドイツ語作家を以下の四つのグループにおおまかに分類する。[4]

1） 旧ドイツ植民地の出身者
2） ドイツに生まれ育った二世で、自身の「アフリカ性」を自覚した、「アフロドイツ人（Afrodeutschen)」と称される作家たち
3） 渡独以前にすでに執筆活動をしており、渡独後の作品がこんにちのドイツ社会に関連したものとなっている作家たち
4） 渡独後に執筆を開始し、ドイツ滞在の経験を文学に昇華させている作家たち

この分類によれば、Darko は「グループ４」の作家ということになる。しかし彼女はドイツに定住しているのではない。1987 年に自分の自由意志により亡命申請を取り下げ、いったんガーナに帰国するのである。帰国後は、子育てと平行して税務検査官として働きながら作品を書き続ける。第一作目の『売られた夢』が刊行されるのは 1991 年である。しかも、作品を書く上で彼女が用いる言語は、常にドイツ語というわけではない。前述したように、彼女の最初の２作品はまず英語で書かれている。仮に亡命者としてそのままドイツにとどまっていたとすれば、他の多くの作家たちのように、創作の際の第一言語をドイツ語にシフトさせていったのだろうか。現在はガーナの首都アクラに住む Darko が、「アフリカ系ドイツ語作家」として依然として、いや、ますます確固たる地位を占めていることにはいくつかの理由が考えられる。

２．Amma Darko と作品モチーフ

1999 年、ドイツ当局との軋轢や外国人に対するいやがらせにもかかわらず、Darko は再度ドイツを訪れる。はじめは朗読会などの活動を各地で行い、Akademie Schloss Solitude（Stuttgart）の奨学金も得て、亡命者でも不法労働者でもない、「作家」としてドイツに滞在するという経験もつんだ。それ以降もドイツとのつながりは密に保ち続けている。それは単に個人の枠を超え、ドイツとガーナ、ヨーロッパとアフリカというひろがりを見せる。ドイツとガーナの NGO（Gold Coast, Yamoransa Communication Association）と協力し、自らが得たドイツでのロイヤルティをもとに、ガーナに職業訓練学校を建てるという活動もそのひとつである。2008 年にはガーナ国内の文学賞である、Ghana Book Award で Best Adult

---

[3] ドイツにおける「移民の、移動の文学」については、以下を参考にした：
Chiellino, C., *Am Ufer der Fremde, Literatur und Arbeitsmigration 1870-1991.* Stuttgart: Verlag J. B. Metzler, 1995; Chiellino, C. (Hrsg.), *Interkulturelle Literatur in Deutschland.* Stuttgart: J. B. Metzler, 2007; Hamm, H., *Fremdgegangen freigeschrieben, Einführung in die deutschsprachige Gastarbeiterliteratur.* Würzburg: Königshausen und Neumann, 1988.

[4] Janos Riesz, 14. Autor/innen aus dem schwarzafrikanischen Kulturraum. in: Chiellino, C. (Hrsg.), *Interkulturelle Literatur in Deutschland.* Stuttgart: J. B. Metzler, 2007. S.248.

Fiction という賞を受けた。作品を生み出す言語がドイツ語であれ、英語であれ、彼女の作品はまずドイツ語で広く受容されており、彼女の活動はドイツと強く結びついている。「アフリカ系ドイツ語作家」というレッテルに、さほどの違和感を受けないのはそういった点からであろう。

アフリカ全体を、いや、ギニア湾周辺の国々と比べても、ガーナという国は深刻な内戦状態や天候危機も報じられておらず、ドイツにおいてもガーナからの政治亡命者は極めて少数である。Darko にとってのガーナでの生活は、大学卒という経歴が示すとおり、経済的には心配がなかったはずであった。にもかかわらず、彼女はその社会を、亡命せざるをえないほど、抑圧的なものととらえていた。

『ハウスメイド』(1998)[5]での次のような一文がそれをよくあらわしている。

> もしおまえがガーナで女性としてこの世に生まれたとしたら、即刻お祈りすることを習うことだね。(91)

では、結局は自由意志でガーナに帰国する Darko は、ドイツでも安住の地を見出せなかったのだろうか。ならば、さまざまな困難にもかかわらず、再度ドイツを訪れ、それ以後もガーナとドイツを往復するのはなぜか。

前述の Riesz によれば、『売られた夢』は、単に彼女の経験を扱った自伝的な内容ではなく[6]、「文学的には明らかに野心的な」、つまり第一世界と第三世界のあいだの問題や関係を扱っており、アフリカの後進性と西欧文明の誘惑を小説のプロットとして用いている、と述べている。[7]

Darko は確かに作品のモチーフとして、「第一世界と第三世界」、「外国人、黒人として異国ドイツで暮らすという経験」を前面にすえている。しかし、その根本には「この世界に女性として生きてゆくこと」にまつわるさまざまな側面が大きくかかわっている。その点において、生活の基盤をどこにおくか、ということは最重要事項ではないことを彼女は学んだのではないだろうか。ガーナに暮らしても、ドイツに住んでも、「女性」としての問題は常についてまわる。それを考え、世間に問う際に、用いる言語が何であれ、言葉は橋渡しの手段にすぎない。『売られた夢』において、主人公 Mara の母は、娘に次のように言う。

---

[5] *Das Hausmädchen*. Übers. Anita Jörges Djafari. Schmetterling Verlag. 1999. 英語原題は *The Housemaid*（Oxford Heinemann's African Writers Series. 1998）。

[6] 発表された当時、ドイツではこの物語は作者個人の体験をもとにしたもの、と考えられた。その後、真のモデル探しが始まった。Darko は作品のキャラクターがそれほどリアルだと考えられたことに喜びつつも、主人公の女性は「誰か特定の人物ではないけれど、どの女性でもありうるのだ」と述べている。http://www.ammadarko.de 参照。

[7] Janos Riesz. 14. Autor/innen aus dem schwarzafrikanischen Kulturraum. in: Chiellino. C. (Hrsg.): *Interkulturelle Literatur in Deutschland.* Stuttgart: J. B. Metzler. 2007. S.257-258.

「人生は道のようなもの。神さま[8]がお前を道の始まりのところへつれてきて、お前を前へと押しやってくださる。神さまだけがその道がどこへ続くのかをご存知なのさ。この道は、神さまがお前のために見つけ出してくださったのだから、感謝してそこを進みなさい。それがおまえにとって一番いいことなのだよ」(10)

しかしその言葉を信じられたのは、村を離れ親の決めた結婚相手と暮らし始めるまでのことであった。すぐに Mara は自分がその「与えられた道」をたった一人で歩いていること、そしてその道は幸せに続いていないことを思い知る。夫は、彼女と手を携えてともに歩んでくれるどころか、彼女が受け入れようとした、その道すら自分の野心のままに捻じ曲げようとする人物であった。ドイツにやってきて、彼女はついにその問題と向き合い、受身の状態からなんとか抜け出そうとするのである。

Mara の心の軌跡には、作者 Darko の問題意識が常に反映している。それらの部分に注目しながらこの作品を読んでいこうと思う。

3．ガーナで―「くちばしの黄色いひよっこ」

『売られた夢』は、ドイツに住む主人公のガーナ人女性、Mara が語る一人称の物語である。「鏡像」と題された第一章で、「わたし」は大きな楕円形の鏡に映る自分自身を見つめている。その表情は自分でも驚くほど様変わりしている。

これがわたしの鏡像、いや違う･･･　これはその残りものなのだ（7）。

「わたし」のいる部屋の上下左右からは、嬌声やらベッドがきしむ音が聞こえる。彼女がいる場所はミュンヘン近郊にある娼館であり、そこでは単なる性行為だけを提供するのではなく、その顧客の多くはＳＭ行為を求めて多額の料金を払う秘密クラブなのである。

（･･･）この自分の部屋でひとり、わたしは遠く離れたところにいるように感じる。一人ぼっちにされ、見捨てられ、そして･･･とても寒い。(中略) 体のほうはそんなに寒くない、そうではなくて、わたしのたましいの深いところでわたしは寒さを感じる（7）。

もっとも払いのよい客はまた、もっとも酷い扱いをする客でもある。彼女の小指は折られたのち、曲がったまま固まってしまった。見るもおぞましい形状の指は、むかし母が幼い娘の手指を使って遊んでくれた、アフリカの村での幸せな頃の記憶をよみがえらせる。

物語の最初で、読者はおそらくある印象を抱く。つまり、ガーナの小さな村からはるばるヨーロッパにやってきたものの、自分の意思に反して娼婦に転落してしまった、搾取さ

[8] ガーナではキリスト教信者が六割以上を占め、現地の神々を信じるものとイスラム教徒がそれぞれ約二割ずつ。この小説では、村の人々は土着の神々を信仰している。

れ続ける気の毒なアフリカ女性。しかし「感情はまだある」(9)、けなげな女性の物語であろう、と。しかし、物語が進行するにつれ、また違った印象を受けるようになる。ガーナという異なった文化背景のものめずらしさは二の次になってしまう。主人公のガーナでの生活を描写する物語の前半では、彼女は「くちばしの黄色い」、何も知らない田舎娘であり続け、そのイメージは少しばかり愚鈍なほどに感じられるからである。

「二頭の白いウシ、四頭の健康なヤギ、四着の衣服、真珠や金製品、そして二瓶のロンドン・ドライ・ジン」(10)と引き換えに、Mara は故郷の村 Naka から、街にあるコンクリートの建物に住む Akobi のもとに嫁入りする。村には幸福で満ち足りた結婚生活を送る女性もいるというのに、父親は三人の娘の結婚に際して、婿の性格よりも、結納の品を重視し、Mara の結婚相手に選んだ Akobi もまた、村の裕福な男の息子ではあるが、まったく思いやりのない人間であった。彼の関心はすべて自分に向いており、とりわけ外見に非常に神経を使っている。村からやってきた垢抜けない花嫁にはなんらの愛情もしめさず、単に自分の身の回りの世話をさせる家政婦扱いである。そんな夫の冷淡さにとまどい、時に暴力的な態度におびえることはあっても、彼女にはそれ以外の選択肢がない。そのような生活を幸せとは思わないが、夫の望みに従うだけの毎日をただ当たり前のように受け入れている。

村の社会においては、結婚した男たちはみな、等しく子どもの、特に男児の誕生を待ち望むものであった。女児は家財の一部として、Mara の父親のように結婚と引き換えに得る家畜や貴金属によって富を増やすために利用するものである。いずれにしても、結婚した以上は、子どもは生まれてこなければならない。しかし奇妙なことに、Akobi は Mara とのあいだに子どもができることを避けようとする。それでも、膣外射精という不確実な避妊方法で終わる男性の側の一方的な性行為の結果、Mara は妊娠し、男児を出産する。あとつぎが無事生まれたことに狂喜する舅たちとは逆に、まったくの無関心を通す夫。Akobi の冷淡さを語りながら、ここでは母となった Mara にもさほどの感情のゆれが見られない。加えて、赤子を母にゆだねて Akobi の世話をするために街に戻る彼女に、幼いわが子と会えない寂しさは描かれない。

これはいったいどういうことであろうか。夫に対する恐れの感情もあまり強くはあらわれてはいなかった。つまり、Mara という女性にはどこか感情の欠落した部分があるのではないか。

もちろんこれは誤りである。彼女が心を解き放ち、感情を表に出すまでには、長い時間をかけなければならなかった。それと同じくらいの年月、彼女の精神は本人の気づかない深い部分で押さえつけられ、閉じ込められて、それらを語るすべさえ学んでこなかったからである。

一方、Mama Kiosk と呼ばれる女性の店で、単なる親切心からゴミの片付けを手伝ったことから、Mara は「仕事をしたら正当な報酬を得るべきである」ということを経験する。そしてその報酬で、自分の望むものを購入できる、ということも。Mama Kiosk は、街に

友人もいないMaraにとって「心の養母」とでもいうべき存在であった。この二点、フェアな経済行為と仲間を得ること、これらが孤独な、抑圧された状態におかれた女性にとって、非常に重要であるとDarkoは主張しているように思える。これは物語の後半で特に顕著となる。[9]

4．ドイツへ―「越境者たち」

夫Akobiの野心とは、結局は純粋に物質的なものであった。高価な洋服に、自動車、家電、家具。美しく装う妻。彼はMaraを説得して、「自動車を捨てる」ほど、ものが豊かなドイツに働きに出ることになる。やがて、彼に呼び寄せられてMaraもドイツに渡ることになるが、それは妻としてではなく、Akobiには彼女を利用して自分だけが思い通りの生活を手に入れようという卑劣な計画があった。

彼女は夫がドイツでの合法的な滞在権を得るために、Gitteというドイツ人女性と結婚したことを告げられる。そして重婚を認めないドイツで、事情を知らされていない彼女を疑われずにつなぎとめておくため、Maraは「妹」としてGitteに紹介される。ここで初めてMaraにちいさな怒りの感情が芽生える。しかしそれは「嫉妬」ではない。Nakaの村では一夫多妻は認められており、彼女もまた、それを理解していた。しかし、複数の妻を持つ男性は、それぞれの女性たちを公平に世話できるものでなければならず、かつ、第一夫人はその中でももっとも尊敬され、一番として常に遇されなければならないのである。第一夫人として正当な扱いを受けられないこと、つまり、主寝室はGitteのもの、自分は客間の床においたマットレスで一人寝なければならない。このことがMaraには理解できない。何も知らないGitteは「義理の妹」に親切で、夫をCobbyと呼び、二人で貯めた金で将来ガーナにヴィラを建てて移り住むことを夫婦の夢として無邪気に信じている、ナイーブな女性である。彼女のナイーブさを反面教師として、Maraは次第に真実を見る目を養っていく。

Gitteが持つ、「アフリカ」に対するイメージは単純な、ステレオタイプ化されたものであり、夫の語るおとぎ話のような計画を、そのまま鵜呑みにして夢見続ける。

> 頭がどうにかなりそうだ。プールですって！　わたしは彼女に微笑みかけ、気がとがめた。Akobiはどうやって彼女にこんな大嘘をついて、こんなたわごとを信じさせ、アフロ・ユートピア（Afro-Utopia）でのすばらしい未来なんていう偽りの夢にひとりほうっておくことができるのか？　飲み水も畑にまく水もないために人々が飢え死にしているっていうのに。でもプールがなくちゃならないだなんて！(126)

---

[9] そして、ガーナであれ、ドイツであれ、Maraをめぐる男性の登場人物たちの自己中心的な面が対照的に際立つという効果も生んでいる。ただし、それはDarko自身が「フェミニスト」＝「男性嫌悪者」であるということを意味するのではなく、自分の語る物語はただ、「声」として受け取られたい、と述べている。http://www.ammadarko.de　参照。

同様に、ドイツに対してMaraが抱いていたイメージも「富める国」としてのありきたりのものにすぎなかった。そこに住む人々は映画に登場する人物のようだとも。

> それまでわたしが白人の女性に抱いていたイメージは（筆者注：Gitteとは）違ったものだった。背が高く、ほっそりしていて、長い足、ブロンドで、燃えるような青い目と長く真っ赤に塗られた爪。（中略）Akobiは目にトマトでも入っていたのか、それとも黒人男性にはGitteみたいな女性以外は見つけられないというのか？(118)

栗色の肩までの髪、背が低くぽっちゃりし、グレーのスカートに深緑のスエットシャツ、黒のカウボーイブーツを身に着けたGitteの姿は、Maraの予想を大きくはずれていた。あれほど外見に気を使い、田舎ものの自分と並んで歩くことさえ嫌がった夫だったのに、いまはGitteのようなさえない女性の機嫌をしきりにとっている。

男性に（経済的に、精神的に）依存する女性は、自分の真に欲するものが何か、ということを、自分自身で考えることをしない。Gitteは黒人と結婚したことで家族とは絶縁しており、夫との将来の夢にすがるしかないのである。一方、無一文のMaraもまた、独力でガーナに戻ることはできない。

この二人の女性をどちらもCobbyは裏切っている。Gitteとの結婚はドイツに滞在するための偽装結婚であり、Maraを呼び寄せたのは、彼女を働かせて、「あがり」を自分のポケットに入れるためであった。仮にGitteが両親との不和に耐えられず離婚を決意したり、Maraが警察に出頭して不法滞在を自首したりすれば、彼の計画はあっさり潰えてしまう。それを避けたいCobbyの饒舌さに二人はすっかり絡めとられてしまっている。「いとこ」と称して、ガーナから愛人を呼び寄せても、夫を失うことをおそれるGitteには彼を問い詰めて真実をあばく勇気がない。自分の食い扶持くらい自分で稼げ、と日々なじられるMaraも、彼によって追い詰められ、結果、売春婦になることを承諾せざるを得ない事態に陥れられてしまう。

5．「決断」

通いの掃除婦の仕事すら、違法労働の摘発を恐れたドイツ人たちに断られ続けたある日、夫とその友人に「いい仕事がある」といわれ、酒に混ぜられた薬のせいで朦朧とした意識のまま、Maraは乱交パーティに参加させられる。それはビデオに撮影されており、Maraはハンブルクの歓楽街にある「クラブ６９」で働くことをもはや断れない。ここでようやくMaraには、夫が自分の「夢」をかなえるために彼女を犠牲にしようとしていることがはっきりとわかる。しかしもう遅い。

> わたしははるかな道をここまで旅してきた。何のために？　みんなのため、私がここへ来るのに手を貸してくれたひとたちのため。わたしはまだ何もしてあげられていない、家族

にも、母にも。ふたりの息子たちもわたしを当てにしていたのだ。わたしはここでかれらのためにも何も手にしていない。もし何もしてやれないとしても、プライドだけは守りたかった。いまやそれすらも奪われてしまったのだ。これがわたしのさだめだったのか？このために多くのオンドリやメンドリやヤギたちがその血を流したというのか？（146）

しかしこの決断は、彼女に大きな転機をもたらした。ひとつは「クラブ６９」のオーナーカップルの一方、Kaye という女性の登場である。彼女は Mara にとって初めて心のすべてを打ち明けられた人物であった。Kaye は Mara の未熟さを見抜き、彼女の支えになろうとする。それは Mara の中にかつて同じように未熟であった自分自身を見出したからである。「自由空間」とつけられたこの章で、Mara は饒舌に思いを語る。「声」を、そしてその声を「聞く耳」を得た Mara は、正義感の強い、そしてユーモアのセンスもある、雄弁な女性であった。Kaye のはからいで、クラブにやってくる客だけでなく、こっそりとフリの客をとることで、Mara は少しずつ金を貯め始める。クラブでは客が払うすべての金は彼女を素通りし、夫のものとなってしまうのだ。「仕事をしたら正当な報酬を得るべきである」ということがここでも実践される。そしてその金で彼女もまた、偽造書類と偽装結婚によってヨーロッパに居住する権利を手にするのである。

それだけで終われば、彼女にはまったく違った新たな道が見つかっていたかもしれない。ある日 Mara は Gitte を呼び出し、夫の様子を聞こうとする。そこで、彼が愛人の Comfort を「いとこ」と称してドイツに呼び寄せるのみならず、住居まで用意してやっていることを知る。その金はおそらく Mara が「クラブ６９」で稼いだもののはずだ。Gitte は Comfort と夫の関係がただの「いとこ同士」の愛情とはとても思えない、と疑いつつも、彼を失うことを恐れて結局別れることができずにいるのだ。

ああ、なんてこと。わたしは二重に心が痛んだ。（中略）わたしはすっかり困ったことになっていたが、彼女のほうはもっとひどい。少なくともわたしは自分のことは自分で真実を知った。夫との関係も。でも彼女は何も気づいていないのだ（161）。

Gitte は黒人と結婚したことで、家族との関係を断たれ、Cobby が自分に残された唯一の存在だと考えるが、Mara には別の考えがある。

ドイツに住んでいるアフリカ人の中にだってきちんとした人もいればやくざものもいる。ドイツ人でも国内･国外問わず、礼儀正しい人、むかつくやつ、どっちもいるのと一緒。よりにもよってあんな男を選んだのは彼女なのだ。彼女のミスなのだ（161）。

なおも彼を信じ続けようとする Gitte をさえぎって、Mara は席を立つ。彼女はある計画を実行に移そうとしていた。私立探偵をやとって、夫と愛人のすべてを調査させるので

ある。その後はクラブを逃げ出してミュンヘンへ移ることを Kaye は提案する。再度「仕事」と「報酬」の関係が描かれる。

「彼（筆者注：ミュンヘンの娼館のオーナー）の取り分は？」「３０パーセントよ」
「そしてあんたは？」（中略）「ゼロ、ほんとにゼロよ。さあ、大騒ぎしないで」
「１０パーセント、ぜったいゆずらない」「だめ、だめ、だめよ！」
「５！」「わかった、それでいいわ」と Kaye は折れた（173）。

探偵もこの小説においてほとんど唯一のフェアなプロフェッショナルとして描かれる。

「これをあなたがすべて見つけだしてきたんですか？」とわたしはおどろいて言った。
「そのためにあなたが私にお支払いになったんですよ」（175）

かつてガーナの村を出たばかりのころ、「街じゃタダなんてものはないんだよ」（18）と Mama Kiosk にあきれられるほど世間知らずだった Mara も、ずいぶん変わってしまった。しかし彼女が手に入れた報酬とは、売春によって得たものである。そのことを彼女は納得し、自分の職業として自分自身に、家族に誇れるのか？

6．おわりに

Mara がミュンヘンの新たな娼館へ移ってから一年が過ぎた。探偵の調査結果はしかるべき方法でしかるべき場所に郵送され、おかげで、Comfort は国外退去処分を受け、Akobi は多額の借金を抱え、Gitte はようやく離婚し、げっそりやせて家族の元に戻った。それで Mara は満足し、幸せになるのだろうか？

ハンブルクにいるときと違って、いまや彼女は完全な娼婦となり、娼婦以外の自分がどうだったのか、もはや想像できなくなっている。経営者の Oves は厳しく娼婦たちの仕事ぶりを監視している。彼は独身で、白いシャムネコだけをかわいがっている。ここでは Mara は Kaye のように心をかよわせる存在を見つけることができない。金は手にできても、彼女は孤独である。たった一年前までは、あれほど気力に満ちていた Mara だが、いまでは麻薬を用いずには一日たりともやり過ごせないほど気分が落ち込んでいる。

わたしはすべてを正しくやり終えたのだろうか？　ときおり疑問がよぎる。しかしありがたいことに、まだ Oves がいる。彼は、わたしが心配したり申しわけないと思ったりするヒマなんてないように手配してくれる。でもだからといって、わたしがまったく罪の意識を感じない、ということではない。結局、わたしもみんなをみじめな状態に追いやることに加担したのだ。そんなつもりではなかったとはいえ。たぶん罪滅ぼしのために、わたしは残りの人生を Oves のもとに繋がれてしまったのかもしれない、と思う。（178）

いま頻繁に考えるのは故郷の母のこと、そして二人の息子たちのことである。彼女はMama Kioskを通じて彼らに送金をしている。名目上は、彼女はアフリカ料理のレストランで働いていることになっている。家族にプレゼントしたさまざまな品物や、車、家の描写が続く。

> わたしがこどもたちに与えてやれるものはすべてお金で買える。尊厳や礼儀といったものはやることができない。そういったものはわたしには何も残っていないのだ（180）。

物語の最初に描写された、楕円形の鏡に映るMaraの姿は、赤いシルクのスリップ一枚で、唇にはまっかなルージュがひかれている。それらの鮮やかな色彩を持つ品々は、かつて、ドイツに来る前にあこがれたモノたちである。しかし、いま実際に手に入れたそれらの品は、自分が娼婦である、ということのトレードマークになってしまった。どぎつい赤は体中の傷跡をカムフラージュするものでもある。

なぜMaraは遠いドイツで娼婦をしているのか？　親が娶わせた夫の選択が間違っていた、自分勝手な男の側に責任がある、と結論付けるのは簡単である。しかし、彼女の側にもこれまでに多くの「決断」のときがあった。彼女には、抜き差しならぬ状態に陥る前に、何度も取り返しのつく瞬間があったのである。夫が語った夢を自身のものと重ね合わせた時期が確かにあったのである。その意味で彼女とGitteは似通った部分を持つ。

ただし、Gitte と違って、彼女は再び「声」を封じられてしまった。自分の映ったセックス・ビデオにいつ、どこで出くわすかしれないからである。仮に Kaye が自分にしてくれたように、Gitteと互いにもっと心を開いて信頼関係を築いていれば、離れて暮らしていてもMaraの大きな支えになったかもしれない。Darkoの第二作、『蜘蛛の巣』では、主人公の女性 Sefa は、ドイツを離れてガーナに戻ったのちも、ドイツ人女性 Renate との友情を保ち続ける。Darko が実際に亡命申請を自ら取り下げ、帰国することになったとき、本来自費でまかなうべき帰国の費用を助けてくれたのはドイツで出会った友人であった。

「地平線の向こう側」は Akobi が Mara に信じさせようとした「パラダイスに一番近い国」ではなかった。彼らの視線も、Gitteの視線も一見相手の方向に向けられているようでありながら、実は一方通行の道が2本並んでどこまでも平行に続いていただけであった。『蜘蛛の巣』のエピローグで Sefa は Renate に宛てて手紙を書く。その中で、彼女は「貧困の中にあるひとも、健康で裕福なひとも、ともに飢えています。前者は食べ物と水に、後者は尊厳や自尊心といったものに。いずれ巡り合わせがこの両者の道を交わらせるのです」（281）と記している。Darko はドイツに滞在することで、さまざまな道と交わる体験をし、そしてそのことが彼女の執筆活動やNGOの活動の基本となっている。それは「声」を失った多くの「Maraたち」に聞き耳をたてる役割を果たすことでもある。彼女の「移動」は今後も続くのであり、それが持つ意味は大きい。